



夜の上海 (the Longest Night in Shanghai)

2007(平成19)年9月23日鑑賞<梅田ピカデリー>

監督・脚本=張一白チャンイーバイ / 出演=本木雅弘ホンキマサヒロ / 趙薇チャオウェイ / 西田尚美ニシタナオミ / 塚本高史ツカモトタカシ / 郭品超クオピンチャオ / 和田聰宏ワタノトモヒロ / 李燦森リチャンセン / 大塚シノブ / 竹中直人 (ムービーアイ、松竹配給 / 2007年日本、中国映画 / 110分)

……日本のトップヘアメイクアーティストの本木雅弘と健気なタクシー運転手の趙薇チャオウェイが夜の上海で出会い、「the Longest Night」を過ごす物語は、多少無理筋気味の設定も……？ それは今や上海は「異国の地」とはいえないほど近い存在となったため……？ しかし、そんなことにこだわらず「ロマンティック・ラブ・ストーリーは何でもあり！」の精神で楽しまなくっちゃ……。北京大学生映画祭で主演女優賞を受賞した趙薇チャオウェイに注目し、彼女の今後の活躍に期待しよう。

原題の方が……？

この映画はタイトルどおり、夜の上海が舞台。私は2006年3月にはじめて上海のまちを見学したが、その夜のまちの美しさは想像以上のものだった。しかしこの映画では、上海で開催された音楽祭にトップヘアメイクアーティストとして参加し、無事その仕事を終えた水島直樹ミズシマナオキ (本木雅弘) が一人外灘を歩き、また公園や路地裏を歩いていると、そこには華やかな上海と生活臭に満ちた庶民的な上海の二面性がくっきりと……。

さらに、上海の高速道路の様子を見せつけてくれるのは、タクシー運転手の林夕リンシー (趙薇チャオウェイ)。先日、2008年8月の北京オリンピックに向けて北京のタクシーはすべて禁煙にされるというニュースが流れたが、上海万博はまだ3年後の2010年とゆったり構えているためか、林夕リンシーは車内で平気でタバコを吸っているうえ、ちょっと乱暴な運転は、気の強さのためとはいえ、ホントはあまりよろしくないもの……？

こんな2人が見せてくれる夜の上海での恋模様がこの映画のテーマだが、邦題の『夜の上海』に対して、原題は『the Longest Night in Shanghai』。水島と林夕^{リンシー}が偶然過ごすことになる夜は一晩だけ、そしてそれが生涯忘れられない、とびっきり長い一夜になったことを考えると、邦題より原題の方がずっとベターでは……？

🎬 久々に主演として登場だが……

元シブがき隊のモックンこと本木雅弘は、1965年生まれだから既に42歳。『スパイ・ゾルゲ』(03年)での好演が印象に残っているが、映画での主演としての出演はそれ以来。ハンサムでスタイルもよくそして演技力もしっかりしているのだが、マイチトップ俳優としてのインパクトに欠けるような気がしているのは私だけ……？

そんなモックンは、映画の冒頭、マネージャー兼恋人の高橋美帆(西田尚美)との関係に疲れ果て、今人生の岐路に立っているカリスマヘアメイクアーティストの姿を絶妙に演じている。音楽祭に水島と高橋が出席するについては、エージェントの山岡(竹中直人)、気の強いアシスタントの原(大塚シノブ)、そして怪しげな日本語を話す通訳小沈^{ショウシン} 小沈^{サム・リー}(李燦森)らがいろいろと失態を演じて、前向きにそれを乗り切っていくリーダーシップはさすがだが、それでもやはり本心はお疲れのよう。そのため(?)、仕事が終了した後たった1人会場を出て、夜の上海をふらふらと散策することになったのが、運の尽き……？

🎬 異国の地でこんな出会いはゴメン……？

この映画のヒロインである林夕^{リンシー}は、死んでしまった親が残してくれた家を守りながら、出来の悪い弟(?)と一緒に生活するため、タクシー運転手をしている健気な女性。車をぶつけるとなぜか喜んでるように思えるのは、修理工場に車を入れると恋人(と勝手に思い込んでいる?)で幼なじみの東東^{ドンドン} 東東^{ディラン・クォ}(郭品超)と会えるため……？ タクシー運転手としても、また弟に対しても一家の主として気の強い面ばかりが目立つ林夕だが、東東の前に立つ姿や東東のことを想っている姿を見ると、やっぱり恋に憧れるふつうの女の子……？

そんな林夕が運転する車がいきなり水島をはねてしまった。そのため水島はいったん空中に舞い上がり、ボンネットの上に叩きつけられることに……。あわてて運転席から飛び出し、水島の頬をたたきながら、「大丈夫?」と呼ぶ林夕^{リンシー}だったが……？

いくら若くキュートな女の子でも、異国の地でのこんな出会いはゴメンこうむりたいが……。

ロマンティック・ラブ・ロマンス映画は何でもあり……？

この映画は日中合作で、監督は『about love アバウト・ラブ』上海編（05年）の張一白^{チャン・イーバイ}。「ロマンティック・ラブ・ロマンス映画は何でもあり」という法則があるわけではないだろうが、俳優として『カンフーハッスル』（04年）に出演した張一白^{チャン・イーバイ}監督は、『カンフーハッスル』での「ありえねー」シーンの続出に馴れたようで（?）、この映画では「ありえねー」シーンがいくつか登場する。その1つが、あれほどの大事故に遭った水島が突然目を覚まし、頭、首、腕、腰、足について奇妙な体操を続けたと思ったら、一瞬のうちに元の状態に戻ったこと。まあ、偶然の出会いのセットとしてはよく考えられたシチュエーションだったが、これではいくらなんでも不自然すぎ……？

さらにその後、言葉が全く通じない水島を無理やり（?）車の中に押し込んだ林夕^{リンシー}は、これから一体どこへ……？ ここから2人の「the Longest Night in Shanghai」が始まるわけだが、「言葉が全く通じない2人」という設定も、「どのホテルに泊まっているかもわからない」から林夕^{リンシー}が仕方なく水島の面倒を見続けるという設定も、今ドキ「ありえねー」シチュエーション……？

だって、水島は音楽祭の仕事においては中国語も交えながら軽快に処理していたし、チェックインを山岡に任せため水島がホントに自分の泊まるホテルの名前を知らなかったとしても、たとえばカード会社のサービス係にでも連絡して日本語の通じる人間を間に入れさえすれば、水島が今音楽祭の仕事で上海に来ているカリスマヘアメイクアーティストであることや、その宿泊ホテルなどはすぐにわかるはず……。

もともと、そんな屁理屈を言ったのでは、この映画のそもそものテーマである2人の「the Longest Night in Shanghai」も「ありえねー」話になってしまうから、そんなヤボは言いつこなし。やっぱりロマンティック・ラブ・ロマンス映画は、何でもありで行かなくっちゃ……。

趙薇^{ヴィッキー・チャオ}は北京大学生映画祭の最優秀女優賞に……

チャン・ツイイー^{チャン・ツイイー} シュー・ジンレイ^{シュー・ジンレイ} ジョウ・シュン^{ジョウ・シュン}と並ぶ中国四大女優の1人趙薇^{ヴィッキー・チャオ}は当然私の大好

きな女優で、姜 チアン・ウェン 文を相手役として1人2役を演じた前作『緑茶』(02年)は「きつと彼女の代表作に」と私が評論したもの(『シネマルーム11』202頁参照)。名女優はどんな役でも魅力的に演技分けることができるもので、この映画での趙 ツイッキー・チャオ 薇はラスト10分間をのぞいて、身なりに構わない(構うヒマのない?) タクシー運転手の役。したがって髪には寝グセがついたままだったり、シャツはボタンのかけまちがいがあつたりと散々……。しかしそれでも美人は美人だからトク……。

中井貴一と姜 チアン・ウェン 文が共演した『ヘブン・アンド・アース』(03年)でも趙 ツイッキー・チャオ 薇は紅一点として出演したが、一大スペクタクル巨編のこの映画では残念ながらチョイ役だった(『シネマルーム4』50頁参照)。しかし、『夜の上海』では堂々の主演。そして、この映画で彼女は北京大学生映画祭の最優秀女優賞を受賞したというから、やはり若い学生たちの間での趙 ツイッキー・チャオ 薇の人気は抜群らしい。

ちなみに、私は来る10月7日から11日の北京旅行において、趙 ツイッキー・チャオ 薇の出身校である北京電影学院で特別講義をすることになっているが、そこでは是非この『夜の上海』における彼女の魅力について論じ、北京電影学院の後輩たちから彼女についての意見を聞き出してみたいものだ……。

高橋美帆と河口龍一の恋模様は……？

張 チャン・イーバイ 一白監督は、水島と林夕 リンシー の恋模様だけではストーリーが単調になりすぎると考えたためか、水島の長年のパートナーである美帆と彼女を愛している年下の青年河口龍一(塚本高史)との恋模様も少し絡めていく。といっても、それは音楽祭終了後に行方不明となった水島を捜す中で発生するサブストーリー的な展開の中でのもの。水島と美帆の長年の交際は、仕事とプライベートが渾然一体となったものようだから、そこに部外者の若い河口が入り込んでいくのはかなり難しいはずだが、河口は果敢にそれにチャレンジ。したがって彼にとっても「the Longest Night」となった上海の夜だったが、さて彼はその「目的」を果たすことができるのだろうか……？

その他の恋模様は余分……？

私は竹中直人という俳優は大好きだが、この映画におけるノリノリなエージェント山岡という彼の役には好感がもてない。ブルース・リーが大好きという山岡は喜劇俳優ばりのパフォーマンスを見せるが、それだけでは面白くないと考えたためか、

張一白監督は山岡についても上海の女性警察官との恋模様を提供……？ また映画の冒頭、音楽祭の打ち合わせについてあれほど対立しケンカしていたアシスタントの原と通訳の小沈についても恋模様を用意し、さらにクールなアシスタント加山（和田聰宏）についても、ジャズバー「Cotton Club」の中で、女性ジャズシンガーとの一夜の恋模様も……。このように張一白監督は、あらゆる登場人物についてそれぞれの恋模様の展開を用意しているが、これってホントは余分では……？

一夜だけだから、グッドなのでは……？

この映画のテーマは単純そのもので、見モノは偶然出会った言葉の通じない男女の恋模様の展開。すると必然的に、途中から興味は、どんな形で2人の恋がエンディングを迎えるのかということになる……。少なくとも私はそんな目でずっとストーリーを追っていたのだが、最後にやっと水島が日本に国際電話をかけることによって、すべてのトラブルは一挙に解決していくことに……。そう、ホントは電話一本でこの映画が描くようなややこしい騒動は起こらずにすむはずだし、そうであれば水島と林夕の奇妙な「the Longest Night in Shanghai」の展開もなかったわけだ……。そして、水島をホテルに送り届けた林夕はそこで水島とグッド・バイ。水島は林夕の電話番号も聞かなかったから、これによって2人の一夜限りの恋模様はすべておしまいと私は思ったのだが、実は張一白監督は最後にもう一幕を準備した……。そのことの是非については、当然議論があるはず。だって、一夜限りの恋模様だからこそロマンティックなまま終わるのであって、翌日2人がまた出会うことになれば、話はたちまち現実的になって……。と思うのだが、さすが張一白監督、そこはぬかりなくロマンティック・ラブ・ロマンスの王道風のラストにもっていくことに大成功。さて、そんなラストシーンとは……？

2007(平成19)年9月25日記